

The Significance of the Past and the Present in Hawthorne's "My Kinsman, Major Molineux"

Hawthorne の "My Kinsman, Major Molineux"
における過去と現在の意義

倉 橋 洋 子

Yoko Kurahashi

序

Nathaniel Hawthorne の "My Kinman, Majon Molineux" は、多種多様の解釈がされている。Q. D. Leavis は、この物語をアメリカが、成年に達することの暗示として読み、Robin は、若いアメリカを代表していると、解釈している。Richard Harter Fogle は、Robin を民話の主人公として読み、彼の賢明さ ("shrewdness"), 笑い声 ("laughter"), 月の光 ("moonlight") について考察し、また、"Young Goodman Brown" との類似についても検討している。また、Roy R. Male は、物語を Robin の父の探究として読み、Sigmund Freud の夢の解釈により、夜の悪夢のような出来事の意味を解明している。Terence Martin は Robin が、大人になり始める ("initiation") という個人的なテーマと、王党派に対する植民地の歴史的な動き、すなわち歴史の寓話が、物語に、織込まれていると、解釈している。

種々の解釈がなされている中で、Marius Bewley は、*The Complex Fate* において、"My Kinsman, Major Molineux" が、Hawthorne と Henry James との両者共通の問題、すなわち、ヨーロッパとアメリカ、過去と現在との葛藤の問題を扱っているアメリカ文学最大傑作の一つであると述べている。¹ Hawthorne は *The Marble Faun* においても、この問題を扱っている。また、Henry James は、*A Passionate Pilgrim*, *The American*, *The European*, あるいは、*Daisy Miller* 等において、このヨーロッパとアメリカの問題を扱っている。

ここでは、"My Kinsman, Major, Molineux" で扱われている過去と現在、ヨーロッパとアメリカの問題を考察することにより、作者 Hawthorne の過去と現在の意義を探究してみる。

1 Marius Bewley, *The Complex Fate: Hawthorne, Henly James and Some Other American Writers*. (New York: Gordian Press, 1967), p. 81.

第 一 章

Nathaniel Hawthorne の過去と現在に対する意義を論じるにあたり、芸術家としての、Hawthorne が19世紀のアメリカ社会に対して、どのような姿勢を取っていたかを考察することから始める。

Hawthorne が文学活動を始めた当時のアメリカ社会は、New England 地方に、最初の移民が17世紀初頭にイギリスから渡航してきてから、200年程しか経過していなかった。Henry James が、評伝 *Hawthorne* の中で次のごとく語っているように、当時のアメリカ社会には、芸術家を生み育てていくための十分な素地が、まだできあがっていなかった。

This moral is that the flower of art blooms only where the soil is deep, that it takes a great deal of history to produce a little literature, that it needs a complex social machinery to set a writer in motion. ²

アメリカ社会には、ヨーロッパのように、豊かな歴史も複雑な社会機構も存在していなかった。アメリカには、古い伝統、すなわち過去は存在せず、存在するものは現在と未来のみである。長い歴史と、伝統を持ったヨーロッパを、象徴的な意味で過去と同等と見なすならば、歴史、伝統のない19世紀のアメリカは、現在と見なされる。

ところで、Hawthorne 自身も、アメリカには文学の素材が乏しく、芸術家の目的に合わないことを、次のように *The Marble Faun* の序文で述べている。

Italy, as the site of his Romance, was chiefly valuable to him as affording a sort of poetic or fairy precinct, where actualities would not be so terribly insisted upon, as they are, and must needs be, in America. No author, without a trial, can conceive of the difficulty of writing a Romance about a country where there is no shadow, no antiquity, no mystery, no picturesque and gloomy wrong, nor anything but a common-place prosperity, in broad and simple daylight, as is happy the case with my dear native land. ³

アメリカには、芸術家に必要な伝統、過去、が存在せず、文学的素材が欠けていることは、Hawthorne に、ヨーロッパに対して、憧れを抱かせ、アメリカの現在を全面的に肯定できなくさせている原因の一つである。

² Henry James, *Hawthorne* (New York: AMS Press, 1968), p. 3.

³ Nathaniel Hawthorne, *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne*. (Ohio State Univ. Press, 1971), IV, 3.

さらに、Hawthorne には、現在よりも、むしろ過去に目を向ける傾向がある。Nathaniel Hawthorne の息子の Julian Hawthorne の記述によると、次の引用で示すように、Nathaniel Hawthorne は歴史的過去に深い関心を寄せたと言われる Walter Scott の小説を好み、それを家族の者に毎晩読んで聞かせ、ついには Scott の全小説を読破した。

Again, two or three years before his death, he read aloud the whole of Walter Scott's novels, taking up the volumes night after night, until all were completed. ⁴

また、Hawthorne は、New England の植民地時代の Cotton Mather 等の歴史書などを読みあさったが、現在の問題点と結びつくような、十分な素材は得られなかった。あまりにも、偏見に満ちた清教徒的な視点から書かれた歴史が多かったからである。

先に引用した *The Marble Faun* や、*The Blithedale Romance* の序文において、あるいは、*The English Notebooks* において、Hawthorne は、伝統、歴史のないアメリカの現在の文化を肯定することができなくて、彼の苦悩を述べている。それは、Hawthorne 自身、過去に興味があり、歴史を好むにもかかわらず、アメリカには、伝統がないため、過去に関わる文学の材料がないことに由来している。

ところで、当時、アメリカには、蒸気船や、蒸気機関車等、実利的な科学的発明が多くなされた。そのため、人々は、商業主義や、実利主義に傾きかけていた。そのような社会において人々は、芸術に対して関心をあまり示さない傾向にあった。Henry James が指摘しているように、そのような状況のもとで、文学活動に専念し、実利的な職を持たないことは、厳しい位置に身を置くことであった。⁵

Hawthorne が、芸術家であること自体が、アメリカ社会において、受け入れられ難いことである上、彼自身も、当時の社会の実利的な部分に適応できないのである。Hawthorne の、当時のアメリカ社会に、適応できないということが、彼の有名な孤独癖の原因の一つとなる。こうして、Hawthorne は、ますます過去の世界に執着しがちになり、ヨーロッパに対する憧れを抱くようになっていった。

ところが、Hawthorne は、ヨーロッパの歴史、豊かな文化に憧れを抱いてはいるが、まぎれもないアメリカ人である。この点は、Henry James も次のように認めている。

Hawthorne was in his disposition an unqualified and unflinching American; he found occasion to give us the measure of the fact during

4 Julian Hawthorne, *Nathaniel Hawthorne and His Wife* (Archon Books, 1968), II, p. 9.

5 James, *op. cit.*, p. 30.

the seven years that he spent in Europe toward the close of his life;
⁶

以上調べてきたように、Hawthorne は、ヨーロッパとか、過去を肯定して、アメリカとか現在を否定する傾向がある。しかし、その反面、まぎれもないアメリカ人として、アメリカの現在を肯定している。このような、Hawthorne が、ヨーロッパ文化と、アメリカ文化とのジレンマに悩むのは、当然のことかもしれない。

第二章

第一章において、Hawthorne のアメリカ社会に対する姿勢を検討してきたが、以下の章では、Hawthorne の作品、“My Kinsman, Major Molineux”において、彼のヨーロッパとアメリカ、過去と現在との問題が、いかに扱われているかを考察してみる。

“My Kinsman Major Molineux”において、ヨーロッパ、あるいは、過去を象徴するものとしては、主人公の青年、Robin の親戚である Molineux 少佐と、Molineux 少佐の住んでいる New England の都会が挙げられる。植民地時代のアメリカでは、植民地の知事は、イギリス国王によって任命されていた。そのため、知事の中には、民衆の支持が得られず民衆や議会により、投獄されたり、命を縮められたりして、アメリカ革命が起きるまで、悲惨な最期を遂げる境遇にあった者もある。

そのような時代に、Molineux 少佐が知事の地位にあったかどうかは、不明瞭であるが、彼が、民衆と対立関係にあった王党派の一員であり、民衆の評判が悪かったことは、彼がリンチを受けることから推測できる。また、Hawthorne が、“The inferior members of the court party, in times of high political excitement, led scarcely a more desirable life.”⁷と語っていることから、確かである。民衆がアメリカを象徴しているならば、それと対立関係にある Molineux 少佐は、イギリスを象徴していると言える。

ところで、Robin は、Molineux 少佐の栄光にあずかろうと、彼を求めて、田舎から出てくる。しかし、Robin の出会う町の人々は、Molineux 少佐の名前を聞いただけで、怒りを表わしたり、Robin の質問に答えようともせず、あるいは、軽蔑を表わしたり、Robin を指名手配中の人物ではないかと、疑いさえする。半信半疑の Robin が、やっとの思いで会う Molineux 少佐は、体にタールを塗られ、羽毛を突きさされた惨めな姿である。彼は、民衆のリンチにあったのである。Robin の想像していた、町の有力者で、民衆から当然尊敬されるべき Molineux 少佐は、もはや存在していない。Robin の想像していた Molineux 少佐は

6 *Ibid.*, p. 5.

7 Nathaniel Hawthorne, *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne* (Ohio State Univ. Press, 1974), XI, 208.

既に過去の人物であった。ここにおいて、Molineux 少佐は、イギリス、あるいは、過去を象徴する人物であると言える。

次に、Molineux 少佐の住んでいる New England の都会について、考察してみる。Robin が船で着いた町は、次のように描写されている。

He then walked forward into the town, with as light a step, as if his day's journey had not already exceeded thirty miles, and with as eager an eye, as if he were entering London city, instead of the little metropolis of a New England colony. ⁸

Robin の訪問した New England の都会の名前は示されていないが、Boston であることは、予測される。Boston であろうと思われるその New England の植民地が、あたかも、London の町のような錯覚を起こさせる。それは、Hawthorne が、イギリスの London の町をその都会に象徴させている故であろう。

さて、ヨーロッパとか、過去を象徴するものを調べてきたが、ここで、アメリカとか、現在を象徴するものについて検討する。Molineux 少佐が、ヨーロッパ、つまり過去を象徴する人物ならば、静な田舎の牧師である Robin の父は、アメリカ的な人物と言える。また、Robin の出かけて行った都会が London の町を象徴するならば、森や丘や、小川のある Robin の静な、複雑でない田舎はアメリカ的である。さらに、Robin の持ち物もアメリカ的である。彼は、かしの木の若木で作られた重いこん棒を、護身のために携帯しているが、これは、田舎では有効であるかもしれないが、夜の都会では、無用である。彼のこん棒は、田舎の象徴であり、アメリカ的なものである。そのようなこん棒を持ち歩く Robin もアメリカ的な人物である。

“My Kinsman, Major Molineux” においては、都会と田舎、そこに住む、Robin の親戚 Molineux 少佐と Robin の父とが、象徴的な意味では、イギリスとアメリカ、あるいは過去と現在の対比をなしているのである。

第 三 章

Hawthorne の作品の主人公達は、象徴的な意味を持つ、都会と田舎、あるいは町と森の間を移動し、二者択一を迫られる場合が多い。*The Scarlet Letter* の Hester と、“*Young Goodman Brown*” の Brown は、森と町との間を移動し、道徳的選択を迫られる。*The House of the Seven Gables* の Hepzibah と Clifford は、七破風の家のある町から汽車で二、三先の駅まで逃げるが、再びもどってくる。Robin も、都会と田舎の間を移動する人

⁸ *Ibid.*, pp. 209-210.

物達の一人である。

Robin は、アメリカ的な田舎の父のもとを去り、ヨーロッパ的な 文明化された 都会の親戚 Molineux 少佐を求めて、旅立ってくる。Robin のこの行動は、象徴的な意味でのアメリカとか現在よりも、ヨーロッパとか過去を選択したことになる。しかし、アメリカを一度は捨てたものの、Molineux 少佐のリンチを目の当りに見て、Robin の気持は一変する。Molineux 少佐の死んだように青ざめた顔が、苦痛で歪み、目は充血し、身は震えているのを見て、Robin は憐憫と恐怖で彼の膝は震え、髪は逆立つ。ところが、次の引用で示されるように、その時、笑声が起り、辺りに広まると、Robin もその笑いに引き込まれ笑い出す。

The contagion was spreading among the multitude, when, all at once, it seized upon Robin, and he sent forth a shout of laughter that echod through the street; every man shook his sides, every man emptied his lungs, but Robin's shout was the loudest there. ⁹

Robin の笑い声が一番大きい。あれ程、Molineux 少佐を、すなわち、文明とか、過去とか、ヨーロッパとかを尊敬し、また捜し求めていたにもかかわらず、Robin は、Molineux 少佐が罪人であることを認めるのである。

この選択をする時の Robin の考え方は、*The House of the Seven Gables* の Folgrave の次のような考え方に似ている。

It seemed to Holgrave—as doubtless it has seemed to the hopeful of every century, since the epoch of Adam's grandchildren—that in this age, more than ever before, the moss-grown and rotten Past is to be torn down, and lifeless institutions to be thrust out of the way, and their dead corpses buried, and everything to begin anew. ¹⁰

文明化された都会と、Molineux 少佐に絶望して、腐った過去を倒し、生命のぬけた制度を投捨てたはずの Robin であるが、希望を持って移動できる場所は、ないように思われる。それは、次の Robin の田舎の家の回想場面から判断される。“Then he saw them go in at the door; and when Robin would have entered also, the latch tinkled into its place, and he was excluded from his home.” ¹¹ 家から閉め出されたというこの思い出は、象徴的なことで、つまり、Robin は、家族から除外されたと解釈できる。

また、Robin 自身、父の家での生活にも、牧師である父の説く説教にも、“... how that

9 *Ibid.*, p. 230.

10 Nathaniel Hawthorne. *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne* (Ohio State Univ. Press, 1971), II, 179.

11 Hawthorne, *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne*, XI, 223.

“evening of ambiguity and weariness, had been spent by his father’s household”¹² と述べられているように、納得できず、うんざりしている。Robin は信仰に疑問を持ち、また、田舎の生活にもたいくつしている。従って田舎の生活や信仰に納得できず、家族の者からも閉め出された思い出を持ち、都会と Molineux 少佐に、絶望した Robin は、都会にも田舎にも象徴的な意味においては、ヨーロッパにもアメリカにも、過去にも現在にも、安住の地がなく流浪となるのである。

第四章

Robin は、精神的に流浪となるが、最終的には、町で会った紳士の次の推めにより、都会に留まり、希望のある将来が予想される。“Or, if you prefer to remain with us, perhaps, as you are a shrewd youth, you may rise in the world, without the help of your kinsman, Major Molineux”¹³

ここで、Robin の Molineux 少佐に対する新たな認識から、罪の認識に関して、考察してみよう。Robin の罪に対する認識は、この作品のもう一つのテーマ、Hawthorne の原罪感と関連がある。すなわち、少佐も、彼を処刑した民衆も、少佐を笑って彼の罪を認めた Robin も、皆同様に罪を犯している。Robin が、Molineux 少佐や、他の全ての人を、Robin 自身をも含めて、皆罪人であると認めることは、Hawthorne の言う原罪感を受け入れることである。Robin の将来が希望のあるものであると、予測されることは、Robin が、原罪感を受け入れたのであろうと解釈できる。

この点が、“Young Goodman Brown” の Brown と異なる点である。彼は、人は誰も罪人であることを認めようとせず、懐疑的になり、不幸な最期を遂げた人物である。また、Hyatt H. Waggoner が、“My Kinsman, Major Molineux” は、Hawthorne の唯一の「幸運の墮落」(“fortunate fall”) の物語であると言っている点でもある。¹⁴ Robin は、Molineux 少佐を過去の人物であると、つまり罪人であると、認識することにより、言い換えれば、Hawthorne の認める原罪感を受け入れることにより、人間的に成長し、希望の持てる未来へ進める訳である。

さて、Robin が都会において、人間は皆罪人であると認識することから、複雑な都会は、罪ある世界、すなわち、現世を象徴していると言える。都会が、罪ある世界の象徴であるならば、素朴な田舎は、罪のない世界、すなわち、楽園の象徴であると言える。

ところで、Robin は、都会に留まるようにと紳士から推められる前に、次のように語って

12 *Ibid.*, p. 222.

13 *Ibid.*, p. 231.

14 Hyatt H. Waggoner, *Hawthorne: A Critical Study* (The Belknap Press of Harvard Univ. Press, 1971), p. 209.

いる。“I begin to grow weary of a town life, Sir. Will you show me the way to the ferry?”¹⁵ Robin は複雑な社会機構のない田舎、すなわち、アメリカに戻る意志がある。しかし、実際には、たぶん、都会、象徴的な意味では罪の世界、あるいは、ヨーロッパ的な古い世界に留まるであろう。

Robin の都会と田舎、過去と現在、ヨーロッパとアメリカ、罪のある世界と罪のない世界の間であって、どちらとも決めかねる態度は、都会のヨーロッパ帰りの青年達の描写にも表われている。

Travelled youths, imitators of the European fine gentlemen of the period, trod jauntily along, half-dancing to the fashionable tunes which they hummed, and making poor Robin ashamed of his quiet and natural gait.¹⁶

Robin が、アメリカを象徴しているとすれば、都会の青年達は、ヨーロッパを象徴している。彼等を見て劣等感を持つ Robin は、アメリカ文化を全面的に肯定できない作者、Hawthorne が、ヨーロッパ文化に対して劣等感を抱いているという点において、Hawthorne とイメージが重なる。しかし Hawthorne はそのようなヨーロッパ帰りの青年達を“imitators”と称し、批判もしている。Hawthorne は、現在のアメリカ文化を肯定したい気持はあるが、現実には、過去のあるヨーロッパ文化も認めざるを得ない。Hawthorne は、過去と現在、ヨーロッパとアメリカの間に位置している。いつれか一方だけを、肯定したり、否定したりできないのである。

D. H. Lawrence は、*Studies in Classic American Literature* において、ヨーロッパ文化に対するアメリカ人の感情を次のように批評している。

But there sits the old master, over in Europe. Like a parent. Somewhere deep in every American heart lies a rebellion against the old parenthood of Europe. Yet no American feels he has completely escaped its mastery.¹⁷

ヨーロッパは、アメリカ人にとって、主人のような、両親のような存在である。ヨーロッパに対する反逆心が、アメリカ人の心の奥深い所にある。しかし、そのヨーロッパの支配から、完全に自由になれたと感じている、アメリカ人はいない。この D. H. Lawrence の批評は、Hawthorne や Henry James の感情をまさに言い表わしていると言える。

¹⁵ Hawthorne, *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne*, XI, 231.

¹⁶ *Ibid.*, p. 215.

¹⁷ David Herbert Lawrence, *Studies in Classic American Literature* (London: Heinemann, 1971), p. 4.

さて、“My Kinsman, Major Molineux”のRobinは、罪を認めたために、アメリカ的な田舎、すなわち、罪のない楽園に戻ることはないだろう。Robinは、ヨーロッパ的な都会、罪人の世界、すなわち、人間世界に住まざるを得ない。この世界で、人間的な成長へと進んでいくであろう。Hawthorneは、過去を肯定することもできず、さりとて、現在を肯定することもできず、つまり、ヨーロッパかアメリカかいずれか一方を選択することができず、二者の間でジレンマを感じていた。Hawthorneの過去と現在に対するこの姿勢が、彼の作品にも反映されているのである。

参 考 文 献

Bassan, Maurice. *Hawthorne's Son: The Life and Literary Career of Julian Hawthorne*. Ohio: Ohio State Univ. Press, 1970.

Bewley, Marius. *The Complex Fate: Hawthorne, Henry James and Some Other American Writers*. New York: Gordian Press, 1967.

Donohue, Agnes, ed. *A Casebook on the Hawthorne Question*. New York: Thoman Y. Crowell Company, 1963.

Hawthorne, Julian. *Nathaniel Hawthorne and His Wife*. Archon Books, 1968.

Hawthorne, Nathaniel. *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne*. Vols. II, IV, & XI. Ohio State Univ. Press, 1971 & 1974.

Hoffman, Daniel. *Form and Fable in American Fiction*. New York: Oxford Univ. Press, 1970.

James, Henry. *Hawthorne*. New York: AMS Press, 1968.

小山敏三郎『ホーソンの世界』東京：萩書房，1968.

Male, Roy R. *Hawthorne's Tragic Vision*. New York: The Norton Library, 1957.

Martin, Terence. *Nathaniel Hawthorne*. New Haven: College & University Press, 1965.

Waggoner, Hyatt H. *Hawthorne: A Critical Study*. The Belknap Press of Harvard Univ. Press, 1971.

———. *The Presence of Hawthorne*. Louisiana State Univ. Press, 1979.